大人主導型スポーツから子供中心型スポーツへの転換

桐蔭横浜大学　渋倉ゼミ　Ｂチーム
○廣澤 歩夢　遠藤 彩希穂　岡元 柾昂　岸 佑太　松村 さくら

１．緒言

現在のスポーツは大人主導型で行われていることが多い。大人主導型スポーツとは、スポーツ本来の目的である自主的・自発的に運動やスポーツを行うことが出来ておらず、大人が中心で指導のみを行うことである。そのことによって、子供に考えさせる機会が少なくなり自主性・自発性の育成が出来にくくなってしまう。大人主導型スポーツの事例としては、①勝ちにこだわり過ぎている（勝利至上主義）、②選手に任せてしまったら勝てなくなるという考えが存在する、③「スポーツ本来の目的に応じた厳しさや辛さを乗り越えることは将来社会に出るうえで必要である」という考えの中に、暴言、暴力、理不尽な指導による罰に耐えることも含まれて考えられている、という現状が挙げられる。これらのことから、大人主導型スポーツによって自主性・自発性を含めたライフスキルの育成が行われにくくなっている。

２．目的

大人主導型スポーツの３つの事例の中から、本研究では、①経験主義的な指導によって指導者の考えを押し付けてしまい、子供の自主性・自発性が欠落してしまうこと、②子供が指導者の考えを従うように求められているため、指示に従えば良いという考えを持ち、指示待ち人間になってしまうこと、これら２つを課題として取り上げる。

我々は、それらを解決するために、子供中心型のスポーツを導入することが必要であると考える。本研究では、自ら考え、行動する能力を身に付けることを「子供中心型スポーツ」と呼ぶことにする。子供中心型スポーツを導入することにより、大人主導型スポーツによって阻害されてきたライフスキルの育成を図れるようになることを目的とする。

３．方法

（１）質問紙調査

調査対象者：k 県スポーツ学部に在籍している大学生のうち、中学・高校で運動部活動またはクラブチームに所属経験のある１年生から４年生、計 105 名（男性 73 名、女性 32 名）。

調査内容：スポーツ活動を行ってきた学生の実態、スポーツ活動に対する満足意識、指導者の指導行動、スポーツ活動中の指導者からの指示の有無、自発的な発言の有無とその理由、スポーツ活動中の主体的な行動の有無とその割合、子供にとって理想とする指導方針。

調査時期： 平成 29 年 9 月中旬から下旬。
手続き：質問紙を個別に配布し回答後に回収。
（２）文献調査
調査内容：中学生・高校生の運動部活動の実態と問題点。
調査時期：平成 29 年 7 月下旬から 8 月中旬。
手続き：インターネット検索及び書籍検索より調査・抜粋。

４．結果と考察
（１）質問紙調査による結果
ア．指導者の指導行動について自由記述形式で回答を求めた結果、子供が指導者に対して良い印象を持っていた回答としては、人間として成長させてくれる、生徒 1 人 1 人に考えさせ行動させてくれる、スポーツと生徒を 1 番に考えてくれる、悪い印象からの回答では厳しい、怖い人、体罰を含む罰を与えてくる指導者がいるという回答が多くあった（表 1)。
イ．スポーツ活動中の主体的な行動の有無とその割合についての回答を選択形式で求めた結果、スポーツ活動中に自分で考えて行動した人は全体の 98%だったが、スポーツ活動を行ってきた上で、指導者から指導を受けたか、自ら考えて行動したか、どちらが多かったか 2 択で回答を求めた結果指導者から指示を受けた人が 59%であった（表 2)。
ウ．105 人全員の理想の指導は何かという質問に対しての回答は指導者から指示を受ける指導が 6%に対して、生徒自ら考えて行動する指導が 77%であった。その他の人の理想は両方のバランスが大切や、両方大事であるという回答が多かった（表 3)。
（２）文献調査による結果
　中学・高校のスポーツ活動の指導者には以下のような特徴が見いだされた。それらは、選手の身体や精神の状態を適切に理解しないということ、勝利至上主義にこだわり過ぎてしまうということ、選手に考えさせる時間が勿体無いという考えを持つということ、などであった。
（３）結果のまとめ
質問紙調査と文献調査の結果から、以下のことが考察された。
ア．指導者から指示を受けるのみで、自分で考えなくても良いと思っているため、指導者の言うことを聞いてさえいれば良いという考えになっている。
イ．実際には指導者から指示を受けているが、自分で考えて行動した方が良いと思っている。しかし、大人主導型スポーツであるため実際にできていない。
ウ．自分で考えて行動していたが、指導者からの指示を受ける指導が良いと思うのは、考えるヒントが与えられていなかったからではないか。
エ．自分で考えて行動して良かったと思ったから、理想でも自分で考えて行動する方が良いと思う方が多い。

オ．指導者に良い印象を持っている人も悪い印象を持っている人も、自分で考えて行動する事を理想であると回答した人がほとんどであったことから子供中心型スポーツを望んでいることが読み取れた。
カ．指導者が勝利至上主義にこだわり過ぎると指示することが多くなり、子供は指示を受けるだけになってしまうため指示待ち人間になってしまうと考えられる。
キ．指導者が子供の身体や精神状態を理解しないことにより、一方的な指導が行われるため生徒と指導者の間に価値観の差が生まれてしまう。

表１ 指導者の指導行動

指導者の指導行動	良い印象の指導者	悪い印象の指導者
	人間として成長させてくれる	厳しい指導者
	生徒1人1人に考えさせ行動させてくれる	怖い指導者
	スポーツと生徒を1番に考えさせてくれる	体罰を含む罰を与えてくる指導者がいる

表２ スポーツ活動中の主体的な行動の有無とその割合

スポーツ活動中の主体的な行動の有無とその割合	指導者から指示を受ける	自分から考えて行動する
	62人(59%)	43人(41%)

表３ 子供にとって理想とする指導方針

子供にとって理想とする指導方針	指導者から指示を受ける指導	自分から考えて行動する指導	その他
	18人(17%)	81人(77%)	6人(6%)

５．解決策と政策提言
（１）指導者及び生徒への研修会
　月に１回、日本体育協会の方やスポーツ少年団の方を講師として招き「これからのスポーツを子供中心型へ」という考えで指導者への研修を行う。また、この研修会で習ったことや学んだことは指導者が所属するスポーツ現場に持ち帰り、今度は指導者が講師になり子供に教える。この研修は指導者だけではなく、子供も理解し、子供が自由に楽しくスポーツを行えるような環境を整えていくことが目的である。

（２）グッドマナー賞の設立

研修会で習ったことや学んだことを実践できているかを判断するために評価システムを設ける。具体的には、日本体育協会やスポーツ少年団、各学校の校長や副校長、教頭等に評価審査員としての協力を要請し、練習時や試合時に大人主導型にならず、子供中心型スポーツの考え方になっているかを評価する。年間を通じて優秀な指導者にはグッドマナー賞と評価審査員資格が与えられる。

６．期待される効果

（１）「指導者及び生徒への研修会」の提言では 2 つの効果が期待される。1 つ目は指導者の知識が増えることである。このような研修会に参加することにより、指導者の知識が増え、経験だけの指導が少なくなると考えられる。2 つ目は子供と指導者のコミュニケーションや意見交換が多く行われるようになることである。この研修会は子供中心型スポーツに変えていくための研修会なので、指導者は子供にコミュニケーションや意見交換の時間を設けることが大切であると考えられる。そうすることによって、指導者が一方的に指示などを出す大人主導型から子供がやるべきことを考え、行動に移していく子供中心型に変わっていくのではないかと期待される。

（２）「グッドマナー賞の設立」の提言では 1 つの効果が期待される。それは子供中心型スポーツの指導スキルが向上することである。今までは指導者を評価する基準が曖昧だったが、「グッドマナー賞の設立」により評価基準を設けて、子供中心型スポーツの指導スキルが向上されると期待される。

７．今後の課題

研究で提言した 2 つの政策の課題、政策規模の拡大を図ることにあたり「時間と人員」が課題として考えられる。初めは特定の市区町村で政策を行っていこうと考えているが全国規模で展開をしようと考えると、研修会開催に時間調整、評価審査員や研修会講師といった人員増加が考えられる。しかし、子供中心型スポーツを行うことは子供のライフスキルを育成するためには必要なことなので、この課題を解決していくことが望まれる。

＜参考文献＞

畑喜美夫(2013)　子どもが自ら考えて行動する力を引き出す 魔法のサッカーコーチング ボトムアップ理論で自立心を養う

公益財団法人 日本体育協会(2015)　平成 26 年度 コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業 報告書

楠凡之(2005)　気になる子供 気になる保護者 理解と援助のために

戸田久実(2015)　アンガーマネジメント 怒らない伝え方